
IS 強襲する者

魔王 なのは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 強襲する者

【Nコード】

N6064Z

【作者名】

魔王なのは

【あらすじ】

ストライクGを持った男の娘がISの世界に行く。この作品は作者の気まぐれ更新です

プロローグ

目を開けると真っ白な空間だった。

(ここは……どこなの?)

わからない……何故私は此処に……

ふう。少し記憶を整理してみよう。

確か私は神社にいたはずだ。夏祭りで友人と遊んでいたら迷子の子供を見つけてその子の親を探そうということになったはずだ。

しばらくして親が見つかりそろそろお開きにしようかということになってみんなと別れた。

家に帰ってから神社で財布を落としたことに気づき、神社に戻った。

探すと神社のお賽銭箱の近くにあったのを発見した。

誰かが拾って置いてくれたのだろうか。

で、ふとせつかく神社に戻ってきたのだから賽銭でもと思い財布を覗くと500円以下の小銭が無かった。

仕方なしに500円を投入し拍手を打ち、

(神様仏様御猫様どうか退屈なこの日常が変わりますように……)

これでよしと思つて後ろを振り返ると目を血走らせ出刃包丁を振りかざす男が見えた。

そこから先の記憶は無い。

(私・・・しんだ・・・の?)

思い出すと物凄く憂鬱になった。

死んだということは私はこのまま天国か地獄にでも行くのだからそう思った。

「いや、お主は天国でも地獄でもないぞ」

後ろから声を掛けられた。

振り返ると後光を背負つた神様っぽい人がいた。

(いや、ばいじゃないこの人は神様だ)

「うむ。その通りわしは最高神・・・ゼウスじゃ。」

「えとゼウス様、私に何の御用でしょうか？それにさっきの・・・

あの・・・」

「うむ、わかっておるから良い。用は簡単じゃお主に少し話があるの」

「私に？一体なんでしょうか？」

「何簡単なことじゃ。実はお主が輪廻の理から外れかかっているお、それをどうにか修正するためにわしが来たのじゃ。」

「・・・それって簡単なことなんですか？」

「最高神じゃからの。それはさておき、お主を輪廻の輪に戻すとき少々不都合が生じての〜」

「はあ」

「簡単に言えば記憶を失わずに輪廻の輪に戻ってしまうのじゃが次の人生のときにお主の性別と容姿が正反対になる、といえはわかるかの？」

「え、ええ。理解はしましたが・・・記憶を失わずに、というのは？」

「おお、それか。お主は今回輪廻の輪から外れたことによって記憶を輪廻を幾度回っても記憶の消去ができなくなつとる。もちろん忘れることは出来るがの。」

「そうですか・・・。うん大丈夫です。」

「そつか。なら行くか？」

「はい。お願いします」

「うむ。そなたに神の加護を」

ガシ！

1話

目を覚ますとそこはどこかのラボのようだった。

(どこだここは……)

現在地が分からないがとにかく行動しようとした。だが、

「おおよ？君は誰かな？？」

後ろから声を掛けられたので振り返ると……

(うえ？)

不思議の国のアリスみたいな服にうさ耳カチューシャ装備の美人さんがいた。

「えと、どちら様でしょうか？？」

「私？私は天災東さんなのだ〜ブイブイVV」

……この姿にしゃべり方、そして東という名前。どっしやぶにっは

(I S の世界ですね)

とりあえず

「えと、私は……」

そこではたと気づく。

「名前が……!?!?」

名前だけではない。自分が歩んできたはずの人生の記憶その物が消えていた。

(なんで!?!?ていうか思い出だけごとそりと抜けている……)

「?どうしたの?名前は?」

痺れを切らした東さんが聞いてきた。

「えと、そのなんといいですか……無いんです……。」

「え?何が??」

「……記憶……。」

ぼそりとそれだけいうが流石は天災。何を言いたいか理解してくれ
たようだ。

「ほうほう。記憶喪失か?それは災難だったね。ふむ。なら私が名
前を君にギフトしてあげようじゃあないか!」

「え?いいんですか?」

「いいとも!それに君がなんで東さんのラボに入れたか気になるし
ね」

あ……どうしよう……。まさか死んで神様に生き返らせて貰ったなんていけないし……。いや、いつそこは……

「えと、それについては心当たりが……」

「むむ？言つてごらんよ」

私は東さんに自分が神によってこの世界に来たことをつげた。もちろんこの世界が自分の元の世界では物語として存在していたことは話さない。

「おおお!!!おもしろいね!!!東さんの予想をはるかに超えた理由に東さん感激だよ!!!」

なんかあつさり受けいられた。

「まあだつたら尚更名前がいるね……。うん、じゃあ君は今日から月、篠ノ之 月だよ!」

「月……。うん、いい名前だね。でもなんで篠ノ之?」

「ふふふふそれはね、君は今日から東さんの助手をしてみらうからだよ!」

いや、無理だからね?貴女は天才……。もとい天災ですからね?私みたいなお頭が中の上程度の頭じゃ無理ですからね?

「そうそう、ユーちゃんのIS動かせる?その頭に付けてるの。」

?頭?そう思つて近くにあつた姿見を見る。

(わく束さんと同じ頭だ)

何故か私の髪に待機状態のISがあった。うさ耳カチューシャの。

(あ、でも似合うからいいのかな?)

そういつてISに触れるすると、キンと頭の中に莫大な量の情報が入ってきた。

「(これは……)わかる……。」

そして名を告げる。

「GAT-X105、ストライク起動。」

光がISからあふれ収まるとそこにはISを装着した月の姿があった。

「ほづほづ。これはなかなか……。」

束さんがなにやら端末を操作してストライクの情報を読み取っている。

「このISはまだ一次移行が終わってないから終わらせちゃおうか。適当にしばらくの間動かしてみて。」

言われるままに動かしてみる。次にふと気になって装備を見てみた。

(近接ナイフアーマーシユナイダー二丁にビームライフルが一丁、

あとはバズーカが一丁にシールド一つか)

なるほど、確かにSEEDのストライクと同じだがイーゲルシュテルンはついていないようだ。

「試してみよう・・・東さん！武器のためし打ちしてみたいんだけど・・・」

「うーん。ここじゃあねえ。じゃあちょっとついてきて？」

言われるままに東さんの後を着いていくと何も無い広い空間に出た。

「ここならターゲットも出せるしある程度あばれても大丈夫だよ」

「ありがとうございます。じゃあターゲットを出してくれませんか？」

「いいよ・・・はいどうぞ。」

「では・・・いきますー！」

ターゲットは全部で20、右手にビームライフルをコールし

(当たって！)

一番近いターゲットを狙撃する。放たれたビームは見事にど真ん中を貫いた。

(次は・・・バズーカを！)

今度は左手にバズーカをコールし引き金を引く。弾が射出されターゲットを木っ端微塵にする。

「・・・なるほど。ライフルはビームであるがゆえに威力、スピード、その他諸々優秀だけどエネルギーの関係上20発が限界だね。バズーカは一つのカートリッジに六発づつ入っているけどカートリッジの予備が15まで格納できるようだから90発打てることになるね。」

その後数発撃つてみて感触になれる。次に近接武器を試してみる。

他の武器と違いアーマーシュナイダーは腰のホルスターに装着されている。それを引き抜き両手に構える。

「はあああああ！！」

ターゲットに近付き右手のアーマーシュナイダーを袈裟掛けに振るう。そして切り終わる前に左で胴を放ち、左右のアーマーシュナイダーがターゲットの中央で触れ合う瞬間に右は右下へ、左は左上へと振りぬく。そこへ蹴り込みを放つとX字に切られたターゲットが吹っ飛ぶ。

（どうやら剣術とかは使えるみたいだね。思い出が無いだけで知識はあるから問題なく出せるだろう。）

そうこうして体を動かしているとフォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してくださいと表示が出た。それを押すとストライクが光を放ち、無骨な鎧のようだったIS がスマートに洗練され、ダークグレーだった機体がトリコロールに変化した。

《ワンオフアビリティ アーマーエクスチェンジ 武装換装発現しました》

「おお！すごいねもうワンオフが発現してるよ！」

「これは・・・！？」

表示されたデータを見て愕然とした。エールストライカー、ランチヤーストライカー、ソードストライカーここまでいい。だが

（ガンバレルにI W S Pだって！？）

I W S Pはともかく、まさかマイナーなガンバレルが出るとは以外だった。

（うーん面白いね。この機体のスペックは白式や紅椿と同じくらいあるね。）

東さんがなにか難しい顔をしているので声を掛ける。

「東さん？どうかしたんですか？」

「え？あ、あはははは・・・なんでもないよ！」

「そうですか？ならいいんですが」

「まあ、ほら！とにかく疲れたでしょう？今日は此処までにしよか。」

「

確かに結構ハイペースでやったのでつかれていた。

「そうですね。今日はこのくらいにしましょうか。」

「そうだね！あ、寝るところは東さんの部屋でいい？」

え？

「女の子同士だしもんぢ」「待ってください!!」「？どうしたのかな？」

「あの・・・私、男の子です・・・」

「へ？ええええええええええええ!!!!!!!!!!!!」

東さんの叫びが虚空へと解けていった。

1話（後書き）

キャラ設定

篠ノ之 月（しののの ゆえ）

15歳

男

容姿は恋姫の董卓（月）。それに東さんと同じうさ耳をつけている。IS学園では男子ではなく女子の制服を着用する。

前世の思い出がなく知識はあるため前世で培った技術はそのままである。

神様はISといくつかの才能をくれた。貰ったのは空間把握能力、剣術の才、火気管制把握能力など。あと素で射撃の才能とマルチタスクが3分割までつかえる。

趣味はお菓子、特に和菓子が好き。特技は女装？

東さんのことを恋愛対象として見ている。東も結構満更ではない様子。

第二話

SIDE月

今私はIS学園にいます。束さんのお願いで妹の篝ちゃんの面倒と天然誑しむつつり助平フラグメーカー一夏の観察をすることになりました。

あ、一夏に自己紹介が回ってきたようだ。

「織村一夏です。よろしくお願いします。」

皆さんが期待の目を込めて一夏に注目しています。

だが、流石は主人公。

大きく息を吸い、「以上です!!」

ガタタタッ!

皆さん、中々いいこけっぷりです。そして一夏、後ろに関羽……
もとい千冬さんが出席簿を構えていますよ?

すっぱーん! いい音です。

「げえ! 関羽!」あゝあ。そんなこと言ったら

スパーン! 「誰が三国の美髯候だ。ばか者。」

「諸君、私が織村千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。逆らってもいいが、私のいうことは聞け。いいな」

その瞬間黄色い声援が飛び、一気に騒がしくなる。

「まったく毎年よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。あれか？私のクラスにだけ馬鹿者を集めているのか？」

まったくそのとうりだと思います。

「で、貴様はまともに挨拶も出来んのか？」

「ち、千冬姉。俺は・・・」

スパーン！！「織村先生と呼べ」

「・・・織村先生」

今のやり取りで二人が姉弟ということがばれていますよ。

「先生！もう一人の男子はどこですか？」

「すでに教室に来ておるぞ」

ざわざわと騒がしくなる。

「篠ノ之」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6064z/>

IS 強襲する者

2012年1月10日08時47分発行